

TAKE FREE

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

Kids In The Forest

木々、木々。

#11

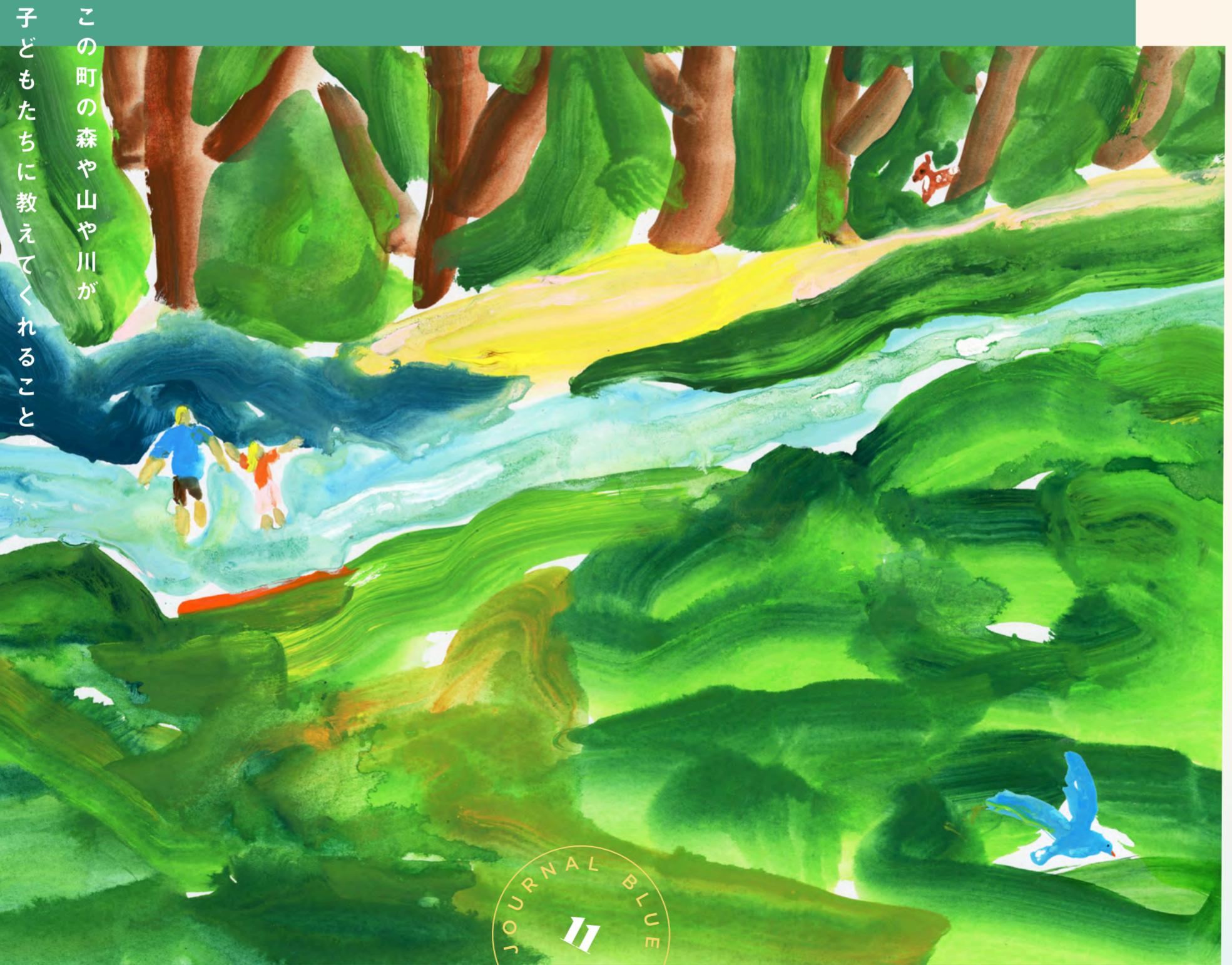
Eleventh ISSUE

特集

Kids In The Forest

育つ、育てる。

遊び、学ぶ、子どもたちの「今」と「未来」について。
便利になりすぎた現代社会において、
奥多摩のような場所で育つ意味とは?
日々、豊かな自然に囲まれながら、
それはどのようにことなんだろう。



PROFILE
汐見稔幸さん

専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学、21世紀型の教育・保育の理想的スタイルを構想する教育哲学の第一人者。東京大学名誉教授、日本保育学会理事、白梅学園大学名誉学長、一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事などを務める。

ことで上手に生きられるという知恵を蓄えてきましたよね。思考や工夫によって自分に対する信頼感も手に入ってきたのです。だからこそ、自然とコミュニケーションしながら生きてきた過去に立ち戻り、陽の光、美しい水、豊かな土といった自然からの贈与によって人は生きているということを認識し直さなければなりません。そして自然の中で生きているということを実感すると、環境に対する畏怖や、工夫して生きなければならないという意識が芽生えます」

ここまで話を聞くと、奥多摩のような場所で子育てをする意義が明快になるだろう。親も子どもも、自然に囲まれた環境で得られる気づきはとても多い。加えて、豊かな自然や人の温かみによって親が充実感を得ることで、それを見ながら育つ子どもたちには将来に対する安心感も増す。

「かつて欧洲で、都会と田舎でそれぞれ幼稚園児がどのような成長の変化を見せるか、調査した事例があります。結果として、自然に囲まれた田舎で育つ子どもたちには、筋肉のしなやかさ、器用さ、神経系の発達が向上するということがわかりました。人工的な玩具や施設で遊ぶより、変化に富む自然の中で遊ぶ方がより身体的な発達が見られるのは容易に想像がつくでしょう。そしてもう一つ、自然の中に暮らす子どもたちが高いレベルで会得したもの。それがコミュニケーション能力でした。遊んでいる最中には“○○ちゃん、そこ危ない!”とか“この土を掘るの、手伝って”といったやりとりが交わされる。自然の中ではその時、その場面で、的確な言葉や態度で相手とコミュニケーションする必要性があるからです。人類はかつてそのような暮らしぶりの中でコミュニケーション能力を発達させてきた、と理解できるような研究結果ですよね」

遊びの中では、試行錯誤しながら自分でアイデアをひねり出すとか、失敗してもめげないでまたやり直す、他者と関係性を保つといったことが頻繁に、そして自然に行われる。汐見さんはこう答える。

「やっぱりものすごく後ろまで一度、戻ってみると、いうことが大切ですね。僕らが子どもの頃はエアコンなんてありませんでした。夏の暑さをしのぐのに、この木陰ならちよと涼しいとか、洗面器に水を入れて足をつければ涼をとれるとか。何をするにも自分の頭で考えて、工夫するしかなかったわけです。ところが現代社会ではリモコンのスイッチを押せばそれでおしまい。生活のあらゆる場面で便利になりましたことで、子どもたちが考える、工夫するという機会が激減してしまいました。歴史上、人類は考えること、工夫する

教育学者・汐見稔幸さん インタビュー

Homeroom Subject!

[自然のなかで子どもを育てる] と
どんなメリットがありますか?

Boys & Girls, be ambitious!

奥多摩で暮らす小学生インタビュー!



01

— 奥多摩で育って良かったと思う?
都会で暮らす方が良かったなって時もあるけど、やつぱり奥多摩で良かったって思うこともある。都会はやっぱり便利な感じだし、流行の中心だってことがちょっとうらやましい。奥多摩はどこでもそのあたりで遊べるのがいいところ。

— 学校が休みの日はどんな過ごし方をしているの?
6年生みんなで集まってどこか行ったりとか、みんなで集まって話したりとか。いつも集まるのは「タンボボ」(※奥多摩町福祉会館の一階にあるカフェ「タンボボハウス」)で、その後に「ボート」(※JR奥多摩駅2階にあるカフェ「ボートおこたま」)に行きます。6年生全員だと10人くらい。みんなが来れない時は6人くらい。

— みんな、仲がいいんだね。
だって保育園から10年も一緒だから。

— 学校の近くに山とか川はたくさんあるけど、そういう場所では遊ばない?
仲間たちで川に行こうぜみたいなのはたまにあります。川があるとやっぱり暇つぶせるしいんじやないみたい。

— 地元で生まれ育った子と、転校して別の場所から来る子がいると思うけど、そういうのは気



PROFILE 森田沙愛さん(9歳)



どんな子?
おくたまつ子。

— 普段、姉弟でどんな遊びをするの?
鬼ごっことか、庭で結構します。登計原(※人気のトレイルコース、登計トレイルに隣接する公園)で遊んだりもします。雪が降ったときにはみんなで雪合戦をしたこともあります。あと、習い事でゴルフをしているので、ゴルフのゲームを買ってもらって、それで遊んでいます。

— 4人姉弟の長女。大変感じるときもある?
下の子がぐずったときに泣き止ませるとか、工夫したり考えたりするのが大変。でも、やりがいはあります。

— 仲良しだけど、喧嘩もする?

します。この前はバレンタインで、お父さんとお母さんが仕事場からチョコレートをもって。何味がいいかで、みんなで喧嘩しました(笑)。

— 好きな科目は?

特に好きなのは、国語。本を読むのが好きだから。

— 最近おもしろかった本は?

エジソンとか伝記の本がおもしろくて好きです。夏休みの間に、図書室にある伝記の本は全部読み終わっちゃった。90何冊くらいかな。すごく好きなのが、古代エジプトのクレオパトラ

の本です。もう何回も何回も読んでる。クレオパトラは、結婚しているんですけど恋人もいて。それは「エジプトを守るためにいた」という理由があって。そういうところもおもしろい。

— 将来はクレオパトラみたいになりたい?

エジプトでミイラとかを研究する博士になりたいです。

— じゃあ、エジプトに住むかもしれない?

でも、奥多摩にずっと住みたいっていう気持ちもあります。都会に行くと、建物がいっぱいあります。自然がなくてストレスが溜まっちゃう。奥多摩は自然がいっぱいだから好きです。

— 友達とはどんな遊びをするの?

友達と一緒に走る。ジャンケン。ジャンケンで勝つとおもんぱか。おもんぱかはスライドドアで作られた。横に開く。

— すごいね。学校はバスで行く?

バスで行く時も車で行く時もあるけど、バスの方がゆっくりだから好き。奥多摩湖が見えて、たまにダムとか凍っていたりするとき。

— 最後に、大人に言いたいことがあったら教えて。

うーーん。先生にだったら、全部お楽しみ会がいい!!って言いたい。



PROFILE 白田蒼葉くん(12歳)



02

読書好きな一人っ子。取材時は、図工の課題で作ったユニークな作品「未来」(写真)を見てくれた。



— しない?
うん。そういうのは知らないし、全然、気にしない。
— 大人になったら何になりたい?
獣医。もともと猫とか犬が好きでそういう図鑑を見ていて可愛いなあと思いながら。だから獣医か、動物園の飼育員か、ペットショップの人。
— 奥多摩にあってほしい施設とかお店は?
コンビニ。今、家から一番近いコンビニが古里で、歩いていくと1時間くらいかかる。あとはお刺身好きなんで魚屋さんがあつてほしい。今は、青梅まで行かないと好きなお刺身が買えないんで(笑)。

PROFILE 白田蒼葉くん(12歳)

— どんな遊びをするのが好き?
んー、かまくらづくり。家に雪を集めてきて。パパがショベルカーでズゴゴーって。それで作ってる。

— 周りに自然がいっぱいだから遊ぶものもたくさんあるね。同級生のなかでも、一番山の奥でどう?(※酒井家は標高800m弱の峰集落在住)

んー。多分そう。夜がしずか。寝てるときに、たまに鹿が出てくる。

— 近所には他に子どもはいない?

いない。(お兄ちゃんと)2人だけだと思う、人間では。ボール蹴りとかすぐ終わっちゃうからつまんない時もあるけど、楽しい!

— 兄弟2人で力を合わせたら色々できるもんね。

うん! 扇車とかおんぶとか組体操とか。あとはかまくらづくり!

— 役割分担はあるの?

あるよ! 奏輔が外の階段とか作る係で、オイラは中を掘るだけ。最近作ったかまくらはスライドドアが作れた。横に開く。

— すごいね。学校はバスで行く?

バスで行く時も車で行く時もあるけど、バスの方がゆっくりだから好き。奥多摩湖が見えて、たまにダムとか凍っていたりするとき。

— 最後に、大人に言いたいことがあったら教えて。

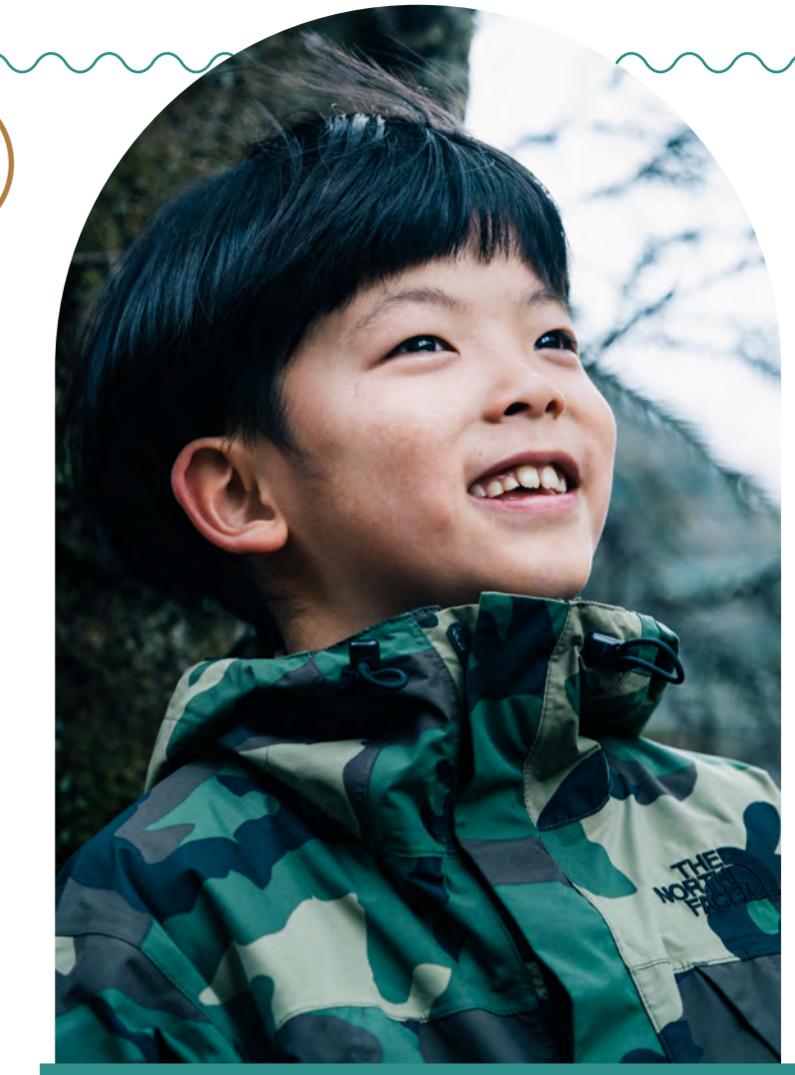
うーーん。先生にだったら、全部お楽しみ会がいい!!って言いたい。



03

PROFILE 酒井悠成くん(9歳)

兄の奏輔くんと旧小河内小学校にて撮影。ジャンケンで勝つとおもんぱか。おもんぱかはスライドドアで作られた。横に開く。



04

PROFILE 坂本明香里さん(10歳)

— 奥多摩に住んでいて良かったことは?
空気が美味しいこと。あとは授業で森林セラピーとか、そういう体験ができること。
— 人がたくさんいる都会の方にはよく出かける?
うーん、あんまり行かない。都会はあんまり好きじゃないんです。
— 小学校は楽しいかな?
はい。全校で58人くらいだと思うけどみんな友達みたいに感じた。最近だと卒業式のための合奏が楽しい。威風堂々として音楽なんですが私は木琴が上手になったから。
— 普段はどんな遊びをしているの?
ゲームとかかな。自転車とともに走るはやってるけど庭がちょっと狭いから外ではあまり遊ばないかも。学校にいる時は外で遊ぶことが多いけど。
— どんな大人になりたいと思う?
人の命を助けたい。一人でも多くの人が生きられるように薬剤師になりたいです。
— 大人になっても奥多摩に住み続けたいと思う?
うん、住みたい。薬剤師になって、患者さんが空気とか気持ちいいねって思ってくれたらいいなって。
— お父さんやお母さん、先生など、大人の人に今、言いたいこととかある?
特にないかも。あっ、宿題が多いなって思うこと



弟・利成くん(小さ)と二人姉弟。利成くんと二人で仲良く遊ぶことも多く、勉強を教えてあげることもあるとか。



奥多摩らしく、伸び伸びと！

どうすれば、子どものやる気をひきだせる？

古里保育園 師岡さと子園長インタビュー

古里保育園の園長先生を務める師岡さと子さん。この保育園で働き始め、今年で実に47年目を迎えるという、まさに全奥多摩っ子のお母さんの存在だ。園児たちがたくましく遊び、伸びやかに成長する背景にはどのような保育があるのか、その思いと保育の中身について、話を聞いていく。

「園とつながっている裏山を“古里っこぼうけんの森”と呼んで、子どもたちが遊べるようにしているんです。自然の地形ですからそれなりに注意して歩かなければならない場所もありますし、坂道をわざわざ作るなど、敢えてちょっと苦労させるような作りになっています。それでもう他の保育園では4歳児以上に、禁止している遊びはほとんどありません。これがやつてもいい?なんて聞いてくる子もほとんどないくらい自由なんです(笑)」

「ついで、あれだめこれだめと管理したくなる幼児に対し、行動を制限することはほとんどないと師岡先生は話す。

「まずは何事も拒否せず、“とにかくやってみよう”という思考を幼児のうちから育まなければいけないと思っています。ですからできるだけ何でも自由にやらせるということになるんですが、その時、保育者に求められるのが観察力ですよね。大人は、子どもに何かをやらせようとする時、つい強引な声がけをしてしまうでしょう。“なんどできないの?”とか“ほら、頑張ってやりなさい”とか。だけど、子どもにも自分ではうまく説明できない“気分”があるわけですよ、今日はなんだかやりたくないとか。誰でも気持ち



PROFILE 師岡さと子さん

奥多摩生まれ、奥多摩育ち。母方の祖父は教師、父は保育園や塾の運営に関わるといった血筋通り、保育園の園長先生に若くして就任。47年の長い生涯に渡り、奥多摩の子どもたちの成長を支え続けている。



自然のなかで

遊ぶ、学ぶ、育つ

この町の保育園

(古里保育園)

ユニークなアイデアを次々導入し お楽しみと学びがいつも満載!

JR古里駅から徒歩で約3分。昭和24年にスタートしたこの園は、壮大な山の緑に囲まれた高台のロケーションがこのとりわけ印象的だ。温もりを感じさせる木製遊具やウッドテラスの充実もさることながら、「古里っこぼうけんの森」と名付けられた遊び場が大きな特徴となっている。体力やバランス感覚を自然と養う森のハンモック、生き物への理解や観察力を育むビオトープ、様々な植物など、園児たちにとってはたまらない遊びのエッセンスが詰まった貴重なスペースなのだ。

奥多摩の土地柄を活かしたお散歩などに加え、この園は園児たちを楽しませる企画も満載。広い世界に触れるキッカケとしての英会話教室や外部から講師を呼んで子どもの学びを考える「ブレーラーム」、身体のバランスなどを楽しく学ぶ企画「古里っこスポーツ」に、定期的な発表会に向けて職員たちが奮闘する劇団「古里っこ」の運営などなど。ユニークなアイデアをどんどん採用する師岡園長の思想、行動力が、園児たち、職員のやる気をきたして、自主性と適応力が自然と身につく仕掛けが随所に見られる。現在園児は70名程度とほどよい人数で、保育士さんの目も十二分に行き届く状態だ。

奥多摩町小丹波528
tel.0428-85-2328
<http://ishidai.p1.weblife.me/>



(氷川保育園)

毎日が冒険! 多彩なおさんぽコース

眼下に清流・多摩川、窓の外には愛宕山。そんな環境にある保育園では、日頃から自然体験が盛んだ。特筆すべきは、多彩な散歩コース。入園のおりに挾まれた「おさんぽマップ」には、手描きのイラストマップに「ハイキング気分で虫探しやドングリ拾い」「つり橋ドキドキ」「河原できれいな石さがしや釣りごっこ」といったワクワクする解説がずり。林道や歩道、渓流などをはじめ、自然豊かな地域全体がおさんぽフィールドなのだ。「与えられたモノで楽しむ遊びよりも、何もない野原でも子どもが自分で想像してつくっていく遊びの方が、子どもの成長にとっては重要。自然に恵まれた環境のなかで、そういうところを伸ばすような保育をしていきたい」と、志茂剛之園長。昨年から始めた「ひかわん探検隊」も、まさに子どもの想像力や発想力を伸ばす自然体験。奥多摩の森林保全などを手掛ける「一般財団法人おくたま地域振興財団」所属のネイチャーガイドの指導下で、ハイキングやキャニオニング、飯ごう炊飯、ディキャンプなどの自然体験を年4回開催する(5歳児クラスのみ)。「子ども達に必要なのはライプな体験。奥多摩の地域や人の財産を活かし、楽しく保育に取り入れていけたらと考えています」。

奥多摩町氷川1416
tel.0428-83-2266
<https://www.futabakai.or.jp>



OKUTAMA

学校めぐり

少人数のクラス編成なので、教師のケアも行き届き、自然に囲まれているがゆえに多様な体験学習が可能な、奥多摩の中学校。
実際、どのような教育が実践されているのかを町内の2つの小学校、1つの中学校で取材した。



総合的な学習の時間では、地域交流を通して様々な体験をする

01 HIKAWA PRIMARY SCHOOL 氷川小学校

東京最西端の小学校として知られる氷川小学校。東京タワーよりも高い標高350mに位置するため、校庭に出ると山の中にいるという感覚が自然と得られるのも印象的だ。これだけ好環境であれば児童にもよい影響が多くあるだろうと容易に想像がつくが、稲葉義愛先生はこうコメントする。「少人数ですから教師の目が子どもたち一人一人に行き届く点はとても大きなメリットだと感じています。また、町の支援もあり、1年生から一人一台のタブレット端末を配布することができています。児童は早いうちから端末に慣れため、自分で好きなようにお絵かきをしたり、動画編集をしたりできるようになるんですよ。」

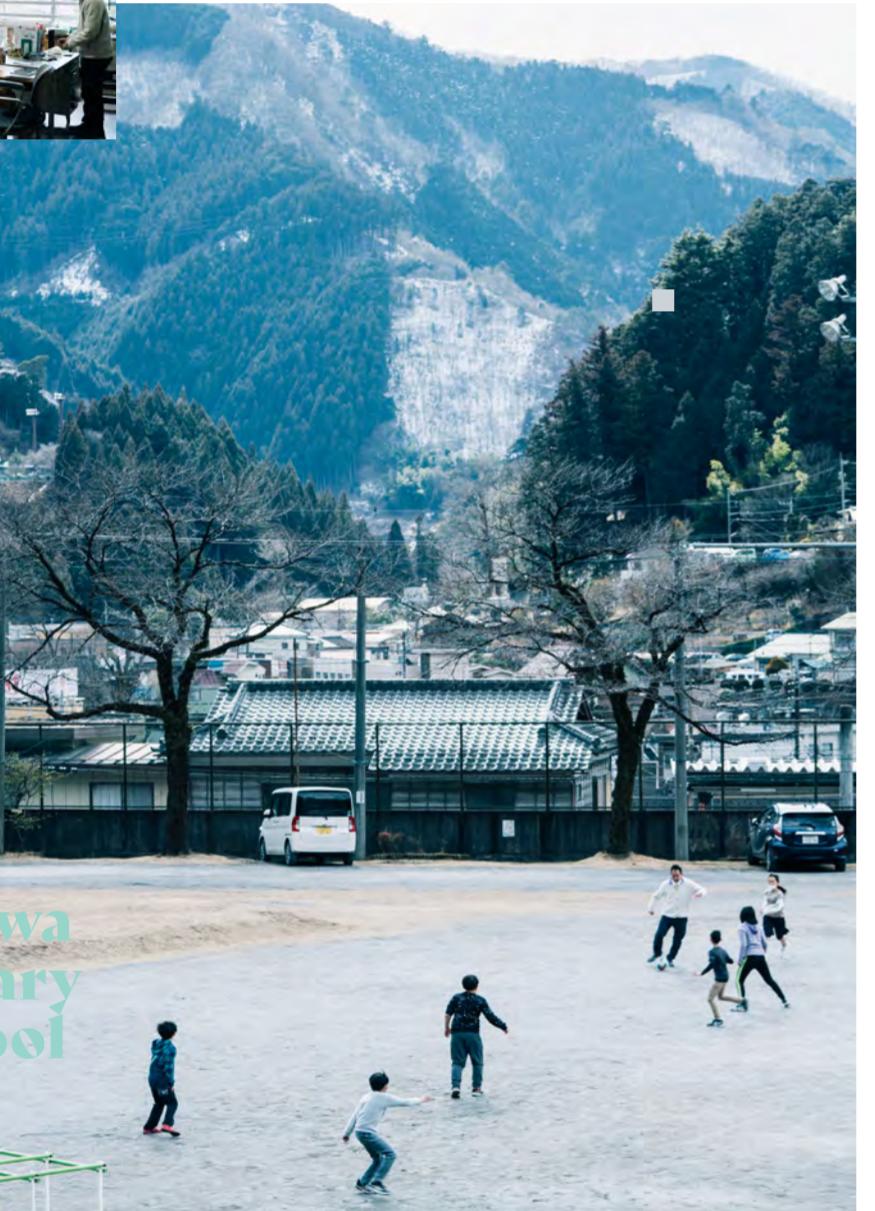
児童の数が少ないと加え、山や川、森に囲まれた奥多摩ならではのメリットについて稲葉先生はこう続ける。

「総合的な学習の時間というものがあるんですが、本校ではこの時間に『奥多摩学習』を探り入れています。ワサビ田で植え付けや収穫を体験したり、町内の公衆トイレを清掃するチーム「オピト」さんと共に清掃を行ったり。その他にも多摩川の源流を見に山梨へ行ったり、間伐を通じて森のことを学習したり。このような現場での実験を学校生活に多く取り入れができるのも、奥多摩ならではのメリットです。」

この他にも各学年がおよそ10人程度と少ないと加え、1~6年生まで縦割りで班をつけて校内清掃を行うなど、児童数が少ないからこそ同年代だけでなく異なる年齢の児童とも自然に交流できるメリットがあるという。でもこうしたメリットが多くある反面、難しい部分もあると話す稲葉先生。それはどうしたことなのだろう。

「大人の目が行き届きすぎて勉強や生活面でプレッシャーを感じる児童がたまにいるのも事実です。保育園時代から仲よしグループを形成している児童が多いので、小学校中学年以上で転校してくる子は時に、輪の中に入りづらいということもあるようです。また、マンモス校と比べれば、自分とは異なる意見を聞く機会がどうしても少なくなるということもあって、多様性を体感するという意味では難しい部分もあります。ですから私たち教員もこのような側面に気を配り、より細やかな配慮が必要になりますね。」

Hikawa Primary School



雄大な山々に囲まれ、四季の移ろいをダイナミックに感じられる環境。



小学生ながらタブレット端末の扱いは慣れたもの。



PROFILE 稲葉義愛先生

青梅市、渋谷区などで教員を務めた後に奥多摩町へ赴任。奥多摩では児童や保護者、地域住民との良好な関係に充実を感じているという。

学年は関係なく親密な交流ができるのも、少人数であるからこそ。



充実した設備が整う学校で、伸び伸びと遊び、学ぶことができる。

Kori Primary School



奥多摩ならではの体験を。
ダイナミックな自然を活かし、



少人数とはいえ、児童たちが集まる校庭はいつも賑やか。



PROFILE 野田豊先生

理科を専門としていたこともあり、自然を活かした教育に興味を持ち、奥多摩へ、体験学習などを通じ、自身も奥多摩を満喫している最中だという。

02 KORI PRIMARY SCHOOL 古里小学校

JR古里駅から徒歩で3分ほどの場所にある古里小学校。広々とした校庭で伸び伸びと運動をする児童たちはとても楽しげだ。そんな児童たちの印象を野田豊先生はこう話す。

「広い校庭と少人数の児童たち。一人あたりの面積がこれほど広い小学校は都内でもなかなかないでしょう。またプールは屋内なので天候を気にしなくていいですし、可動式の床で水深を調節できることで低学年から高学年まで安心して泳ぐことができるんです。このような環境面でのメリットは大きいと思います。このような土地ですからやはり児童たちはとても素直で人懐こく、伸び伸びとしているなという印象です。地域の方々からは子どもたちへの温かい支えというか、愛情をいただいている、そのような人の関わりが児童へ良い影響を与えてくれているのも大きいですね。」

以前は東京・調布市で教師をしていた野田先生。自然を活かした授業を行いたいという理由から奥多摩で教師となる機会を得たという。

「こちらに赴任して驚いたのは、児童と一緒に山に登る機会がとにかく多いということ。高学年はもちろん、低学年のうちから奥多摩の山、道を歩くという活動が頻繁に行われているのはこの小学校ならではの特徴だと思います。遠足は1学期、2学期、それぞれにあります。秋の遠足は全校一団に行うので、1年生が6年生と交流しながら自然と親しむといった体験ができるんです。」

昨今、全国の小学校ではこのような体験活動がどんどん縮小される傾向にある中で、奥多摩では貴重な機会が得られ、子どもたち、教員とともに充実感を味わっています」

クラブ活動においても、子どもたちがやってみたいという気持ちを大切にしながら、活動内容を決定。木の登り方を学んだり、七輪で火起こしに挑戦したり。自然に囲まれた奥多摩ならではの活動が子どもたちの成長に良い影響を及ぼしていると野田先生は話す。

「教師としては、子どもたちがやがて社会に出ていった時、多様な人々の中でもたくましく、楽しく生きていけるよう伝えたい。高齢者施設や中学生との交流などができるだけ子どもたちに広い世界の入り口を見せてあげられればと思っています」



2022年2月現在では1年生20人、2年生19人、3年生28人。
学年問わず皆が顔見知りの関係だ。

Okutama Junior High School



将来への備えも万全。
先進的なICT教育で



ICT教育や国際交流など、奥多摩にいながら世界や未来とつなぐ教育を実践中。

OKUTAMA JUNIOR HIGH SCHOOL 奥多摩中学校

町内唯一の中学校が設立されたのは7年前のこと。それまで2つの中学校があったものの、生徒数の減少などからひとつに統合され、奥多摩中学校の歴史がスタートする。このタイミングで積極的に推し進められたのがICT教育だった。社会科を担当する星野靖先生はその中身についてこう説明する。

「本校では創立当初から全員にタブレット端末を一台ずつ配布。多くの学校がこうした端末を家に持ち帰れないルールですが、生徒たちと一緒にルールづくりをした結果、学習のために使うということだけ守ればどこで使ってもいいという点で、皆、おおいに活用しています。授業中は画面を皆で瞬時にシェアしたり、必要な資料をpdfですぐダウンロードできたり。ひとつのテーマに対して皆が意見を出し合う時、それがひとつの画面で共有できるなど、タブレットならではのスピード感が学力やコミュニケーション能力の向上にも貢献していると感じます。本校の校訓であり、教育上重視していることに“協働”があります。この観点で見てもタブレットを利用した活動はとても有効ですね」

これからの時代、こうした機器を使わず生きていくのは考えられないという星野先生。ICT機器との付き合い方を自分で考え、最良の形で生活に取り入れていく体験ができるという意味では、都内を見回しても最先端の取り組みだと話してくれた。

視野を広げるという側面では、町の海外派遣事業と連携して外国との交流に力を入れているのが奥多摩中学校の大きな特徴。オーストラリア・バイロンベイの中高生が奥多摩にやって来たり、奥多摩からの希望者がバイロンベイを訪れたり。こうした交流を通じ、英語学習や異文化への理解を深めているという。

「一年生20人前後なので、何をしても個人の存在感がクローズアップされます。発言をする機会も増えるのでまさに全員がいつでも主役。どんな生徒でもリーダーシップをとる機会があるので成功や失敗、様々な体験を通じて学びが多い。教育上、理想的な生徒像なのではないかと個人的には感じています」

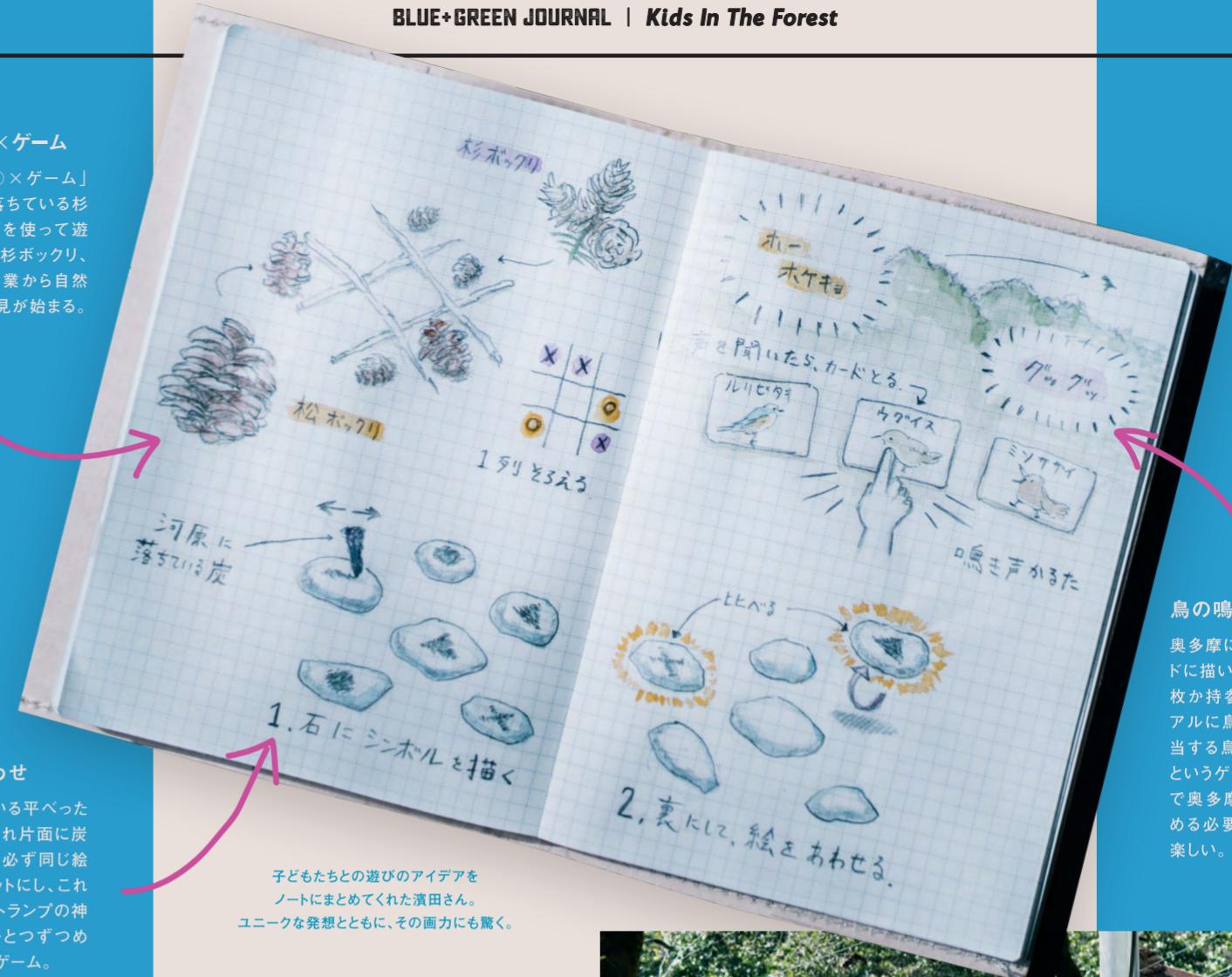


星野 靖先生

福生や青梅、檜原村などの教員生活を経て、奥多摩に赴任。社会科担当。スキーの名手でもあり、生徒たちと雪山へ行くのもひとつの楽しみ。

杉ボックリの○×ゲーム

誰でも知ってる「○×ゲーム」だが、山道などに落ちている杉ボックリ、小枝などをを使って遊ぶというアイデア。杉ボックリ、小枝などを探し作業から自然観察の楽しみや発見が始まる。



鳥の鳴き声カルタ

奥多摩にいる鳥たちの絵をカードに描いていく。このカードを何枚か持参しつつ、山や森へ。リアルに鳥の声が聞こえたら、該当する鳥のカードを取っていくというゲーム。ネットや図鑑などで奥多摩に住む鳥の知識を深める必要があるが、それがまた楽しい。

It's A Playground

奥多摩でこんな風に遊ぼ。

奥多摩に移住してきた濱田 隆史さんは
デジタルやアナログのゲームを制作するクリエイター。
そんな濱田さんに、アウトドアで子どもと
遊ぶ方法について話を聞いた。



モルック

発祥はフィンランド。現在ではアウトドア・スポーツとしてヨーロッパを中心に楽しめているゲーム。モルックと呼ばれる木製のアイテムを投げ、スキットルと呼ばれる12本のターゲットを倒すというシンプルなルール。モルックはソフトボールの投手のように下から投げ、地面のバウンドを利用して効果的にスキットルを倒せる。どんな場所でも遊べるので、河原や森の中などに持ち込むのも楽しい。

1年ほど前、東京の国分寺から奥多摩へ移住してきた濱田さん一家。小学校に入学する長男、3歳の長女を連れて移住してきた理由をお母さんの聰子さんはこう話す。

「移住してきた最大の動機はやっぱり子育ての環境を求めて、ということでした。以前は国分寺に住んでいたんですが、校庭が狭く、児童数も多い。そんな状況で長男がどんどん活発になってきている様子を見て、もっと伸び伸びした場所で子どもたちを育てたいと考えたんです」

予想通り、移住後は子どもたちが伸び伸び日々を過ごす姿を見て、一安心していると話す聰子さん。一方で「遊び方」を教えることについては親も努力しなければならないとお父さんの隆史さんは語る。

「こういう場所に住めば子どもたちは勝手に自然の中で遊ぶんだろうと思っていたが、全然そんなことはなかった(笑)。ただ自然が広がっていても、そのような環境とどう関わらいいかが子どもには分からないし、僕だって一緒に勉強していくことがこれから必要だと思っているんです」

河原での釣りや山登りなど、これから親子で挑戦してみたいことがたくさんあるという濱田さん一家。そんな活動の面白味を親の側も覚えていきながら、アウトドアでの技術や知識を少しずつ子どもたちへと伝えていきたいといいます。

今はまだ子どもたちが小さいため、ゲームクリエイターである隆史さんが手軽に自然と親しめる遊びを考案し、親子で実践しているとか。北欧発祥のゲーム「モルック」などを利用して、屋外で遊ぶ楽しみを親子で味わっているという。

「せっかく奥多摩に住んでいるんだから河原とか森に入ってできる遊びで楽しめてあげたい。できれば、自然とどう関わっていくかを学ぶためのステップとなるようなゲームを子どもたちと試してみたい」

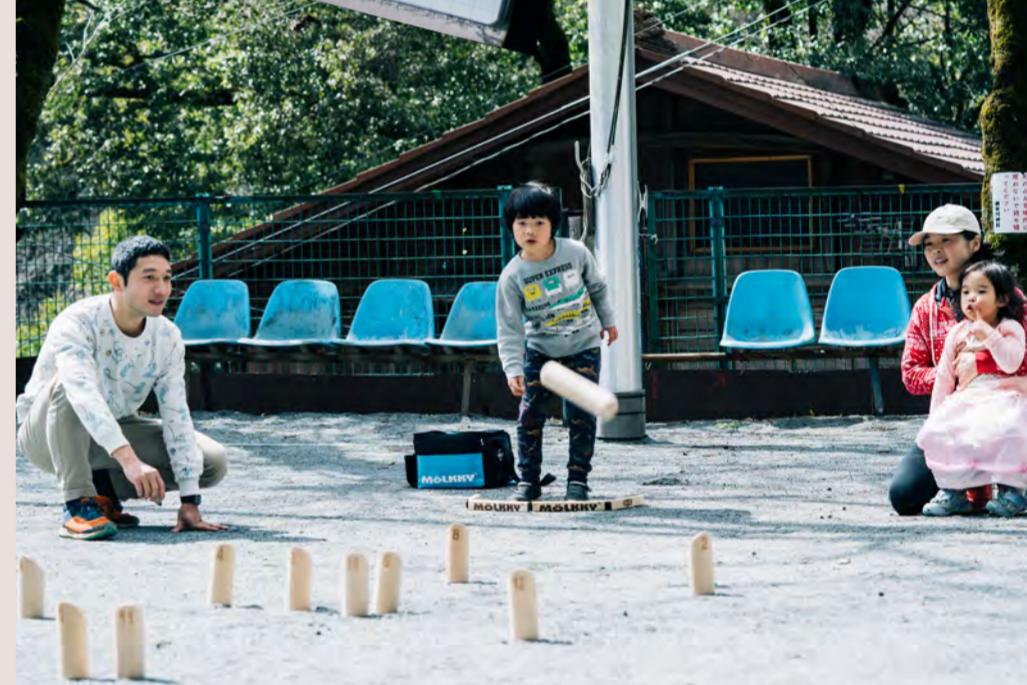
遊びは自然を理解するひとつの手段だと話す、隆史さん。石ころや小枝などを利用した誰でも簡単に実践できる遊びをいくつも紹介してくれた。子どもたちが遊びを拡張できるよう、大人たちが努力して遊び方のお手本やアイデアを示す。その大切さを濱田さん一家は教えてくれた。



PROFILE

濱田さんファミリー

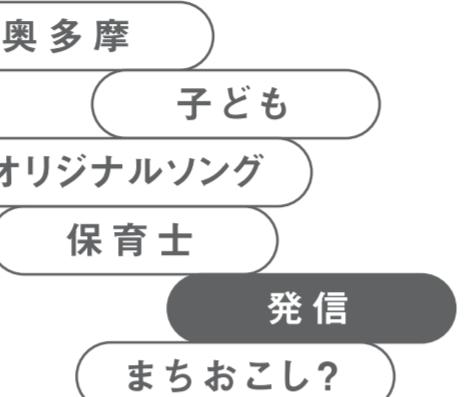
隆史さん(父)は、ゲームクリエイターとして会社を経営。聰子さん(母)は立川で小学校の教員を務める。家族四人で日々、奥多摩生活を満喫中。



01



What is ‘OBC’?



「だべだベロック、はじまるよー!」

舞台の中央、マイクを手に持つ男性が声を張り上げると、その熱量と共に鳴るようにパフォーマーの子ども達がシャウトする。軽快なりズムと楽しげなメロディーラインに合わせ、コミカルな歌と振り付けが始まる。誤解を恐れずにいえば、歌い手の男性は特別美声という訳でもないし、子ども達の行動もバラバラ。全力で踊る子どももいれば、棒立ちになっている子も、泣き出す子もいる。でも、そんな様子を観客たちは目を細めて見つめ、手を叩いて身体を揺らす。老いも若きも、観る人も観られる人も。「幸せが感染している」と、誰かが笑った。

この「OBC ライブ」。奥多摩町をはじめ、近隣市町村ではちょっと有名なパフォーマンスだ。盆踊り、アートフェス、収穫祭、高齢者施設の訪問などなど、数々のライブ実績を持ち、一度観れば誰もが心を驚かせられてしまう。主催するのは、OBC こと、「Ogouchi Banban Company (小河内ババーンカンパニー)」。過疎地域である奥多摩町の小河内地区から西多摩を盛り上げるという目的で、2014年に発足したまちおこし団体である。

その中心人物のひとりが、小河内出身の島崎勘さん(39歳)だ。奥多摩町唯一の男性保育士である島崎さんの通称は、「かん先生」。かん先生のOBCにおける主な役割は、パフォーマー、作詞作曲、振り付け、広報活動など。多彩な才能を発揮する彼は、自身のことを「地域興興型保育士」と言い、OBCでの活動は「子ども参加型まちおこしエンターテイメント」と解くが、多忙な本業とは別にOBCをはじめた動機についてこう説明する。

「いつからか、保育園は保育園という密室のなかで完結するものではなく、町のなかにある保育園である、という考えを持つようになって。地域には様々な資源があるし、子ども達をもっと連れ出したいと思うようになった。そのためには僕自身の視野や世界を広げたいというのもあって地域の人と繋がるようになったんです。そんななか、知り合った方に『奥多摩を盛り上げる歌を作りたいからかん先生つくってくれませんか?』と依頼されたのが、きっかけのひとつ。単純におもしろそうかも、と思って(笑)」

保育士業務の一環として、アコーディオンの

02



1.町唯一の男性保育士&OBCパフォーマー 島崎勘さん 2.2020年に第一子・楠生くんが誕生。父親としての目線も加わり、今後のパフォーマンスにもいい変化が生まれるかもしれない。3.子ども達の笑顔が弾けるOBCライブでの1コマ。

Ogouchi Banban Company
<https://ogouchibanban.jp>
Twitter @ogouchibanban
YouTube&Facebookは、「Ogouchi Banban Company」で検索。
最新の活動や公演情報については、ホームページやSNSをチェック。

[奥多摩育ちの次世代アスリート]

THE NEXT GENERATION

奥多摩だから。奥多摩でも。子どもの頃から、諦めずに努力を続けてきた若きアスリートがいる。

カヌー選手 楠寝 大亮くん(18歳)

奥多摩で
育つたから、カヌーを
続けてこられた



PROFILE

2003年生まれ、東京都出身。5歳の時に、父親の仕事の都合で奥多摩に移住。小学1年生の時にカヌーに出会い、3年生で本格的にカヌースラローム競技を始める。都立青梅総合高等学校卒業後、この春より国士館大学に入学。主な戦歴に、ジャパンカップ最終戦4位、日本選手権大会6位、第44回NHK杯全日本競技大会5位など。JR日本代表Bチーム、u23日本代表Bチーム。2021年度オリンピック強化指定選手認定。



Canoeist
Daisuke Neshime

ゴルフ選手 杉山 奈央さん(17歳)

家族の
サポートとともに
全国大会へ



PROFILE

2004年生まれ、奥多摩出身。小学5年生より本格的にゴルフを始める。小学校卒業後、共立女子第二中学校高等学校に進学。同校ゴルフ部に所属。中学生の時に、全国中学校ゴルフ選手権大会団体の部にて5位入賞。高校進学後は、東京都高等学校ゴルフ選手権冬季大会にて12位など、着々と実力をつけている。2022年3月、全国高等学校ゴルフ選手権春季大会出場を果たした。



Golf Player
Nao Sugiyama

この春、奥多摩駅にある垂れ幕が掲げられた。「祝・全国ゴルフ選手権大会出場 杉山奈央さん」。奥多摩生まれ奥多摩育ちの高校生、杉山奈央さん(17歳)の輝かしい成績を表彰し、激励の意を込めたものだ。「もう少し名前を小さくしてとお願いしていたんですけど」と話すのは、お母さんの栄利子さん。照れくさくもあり、もちろん誇らしくもあり。奈央さんが才能を開花させたのは、そんな温かい家族の存在があつてこそと言えるだろう。奈央さんは、ゴルフの練習場に行くようになつたのは、小学校低学年の頃。父・勉さんの趣味だったゴルフの練習に付き合つて、練習場で遊ぶようになった。本格的にゴルフをはじめたのは、小学校5年生のとき。やはり父の影響でコースを回るようになり、めきめきと腕を上げた。その後はゴルフを続けられる環境を求めて、八王子にある中高一貫の私立校に進学。通学には2時間かかるが、全国有数のゴルフ部があり、ゴルフを続けるには最適な環境だ。さらに3年前には、勉さんの提案でゴルフ仕様の新築の自宅を建てることに。2階に、廊下としては広すぎるスペースを設け、そこでバターの練習ができるようにした。また、裏庭には、ネットを使った打ち込みの練習スペースを用意。平日の帰宅後は、自主練習として大体200打を打つのが日課で、週末は父の付き添いで埼玉など町外のゴルフ場へ。家族一丸となった努力が実を結び、着々と順位を上げ、全国大会出場という栄誉を果たした。さて、今後の目標は? 「大学でゴルフを続け、プロテストを受けたいと考えています。飛距離を伸ばすことと体力づくりが今課題です」。体力づくりの一環として、自宅周辺を走ることもあるそうだが、ゴルフの練習環境としては恵まれていると言えない奥多摩。この町出身のプロゴルファーがもし生まざとしたら。なんとも嬉しいビッグニュースだ。

No. 1

佐藤さんファミリー

佐藤淳さん(45歳)・ZUBIA Idoia(スピア・イドニア)さん(47歳)
佐藤絹さん(12歳)



Q. 移住したのはいつ? A. 2021年8月 Q. 奥多摩へ移住しようと考えた理由は? A. コロナ禍で自分たちの生活環境や、やってみたいことなど色々と考えさせられました。そこで、前々から日本の帰国移住を希望していたのと、半分、日本人の血が通っている娘に日本での生活の経験させてあげたいという願いからです。**Q. 奥多摩での子育ては?** A. 我が家はフランスのナント市という町から移住をして来ました。以前の生活環境とは大きく異なり、山々に囲まれ、鳥の鳴き声が響き、紅葉する風景が数歩いた場所にあり、野生の動物などと遭遇する機会もある奥多摩町の素晴らしい自然環境は、娘の成長過程において良い影響を与えてくれていると思っています。**Q. 余暇は家族でどう過ごしている?** A. 登計(とけ)へ散歩へ行ったり、川沿いへ降りたり、奥多摩湖の方で散歩したり。**Q. 奥多摩の生活で親子の絆は深まった?** A. 移住する計画をして準備、実行に至るまでの過程を家族で協力し合いながら過ごし、奥多摩町に辿り着き、生活をしている中で絆は深まると感じています。

No. 2

中村さんファミリー

中村裕一さん(42歳)・中村久美子さん(39歳)
中村頃くん(6歳)・中村知聖さん(4歳)



Q. 移住したのはいつ? A. 2018年11月 Q. 奥多摩へ移住しようと考えた理由は? A. 都内の保育園問題、子育て環境、アウトドアな暮らしを望んで。**Q. 奥多摩での子育ては?** A. 景點所の付き合いが都心で暮らすより多いので、子どもたちだけで外に出て遊ばせていても、どなたかが子どもに声を掛けてくれたり、家の前を通った時に「今、子どもたちは〇〇にいるよ~」と教えてくれるので安心できる。**Q. 自然の中での遊びや学びは?** A. 季節の移り変わりを感じられ、子どもも「山が色づいてきた」とか「冬の風だ」、「梅が咲いてきた! もうすぐ春かなー」など、大人のようなことを言うようになりました。**Q. 奥多摩町にどんな施設やサービスがあればうれしい?** A. 子育て世代が増えているのだから小児科医は必要。**Q. これから奥多摩へ移住しようという家族へアドバイスは?** A. 奥多摩に来て、当初は知り合いがない状態でしたが、住んでみると近所の方々、保育園の先生方など、色々なアドバイスをくれる人達がたくさんいて心強いですよ。

Our Family Life

奥多摩での子育てはどんな感じ?

自然に囲まれた奥多摩での子育てについて、
移住してきたファミリーはどう感じているのだろう。

ここ数年で奥多摩に住み始めた4家族に、
そのリアルな印象を尋ねてみた。

No. 3

前山さんファミリー

前山哲郎さん(34歳)・山ノ内茉由子(まゆこ)さん(34歳)
前山穂(みのり)くん(4歳)・前山蘿(ふき)ちゃん(1歳)



Q. 移住したのはいつ? A. 2021年8月 Q. 奥多摩へ移住しようと考えた理由は? A. 自然豊かな田舎(郊外)で暮らしたいと考えていた際に、何度も遊びに行行ったことのある奥多摩町で若者向け移住制度のことを知って考え始めました。妻の家族が近かったことも要因の一つです。**Q. 奥多摩での子育ては?** A. 空気の良さや鳥のさえずりなどまるで旅先での風景や体験を生活しながら感じることができます、それらを子供たちが幼いうちから経験できるのは良かったと考えています。**Q. 奥多摩の生活で親子の絆は深まった?** A. 移住をしたばかりなので、親子共々に「初めての場所で、初めてのこと」を一緒に経験する機会が多く、それそれが見たり聞いたりした体験話を話し合える機会が増えたように感じます。**Q. これから奥多摩へ移住しようという家族へのアドバイスは?** A. 車がないとかなかなか大変な環境だとは感じますが、その分、他の費用が低コストで、加えて子育て世代への制度も手厚いと思います。

No. 4

黒木さんファミリー

黒木絵麻さん(49歳)・黒木将器さん(38歳)
黒木遊仁(ゆうじん)くん(5歳)・黒木仁心(にこ)ちゃん(3歳)



Q. 移住したのはいつ? A. 2021年3月 Q. 奥多摩へ移住しようと考えた理由は? A. 一番の動機は2人の子どもたちの喘息体質を根本から改善したいと思ったことです。また、私たちも自然のあるところで育ったこともあり、都心での生活の恍ただしさに疑問を感じたり、当時の生活環境に疲れを感じていた、ということもあります。**Q. 奥多摩での子育ては?** A. 一番の魅力は自然環境です。野生の動物を見たり、自然の厳しさを感じられること、また何でもすぐに手に入るコンビニ生活を脱して、程よい我慢や生活計画が必要なのも、いいことだと思います。近所の方々が、すぐに子どもの存在を把握して下さって、声をかけてくださるものが多いです。**Q. 余暇は家族でどう過ごしている?** A. 遊具のある公園がないので、小学校の校庭で遊ぶようになりました。ゲートボールをしているお年寄りや野球の練習をしている大人もいて、学校という存在がどの世代にとっても身近な場所なのだと感じました。



都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

File 08

ベーカーさん・木室さんファミリー



2020年夏に東京・江東区から奥多摩へ移住してきたというウイリス・ベーカーさん・木室恵美さん、ひびきくんのご家族。たまたまドライブで訪れた奥多摩に魅力を感じ、移住を考え始めた。すぐに町営住宅に入居希望を出し、家も確保したという。恵美さんはこう話す。「私たちもともとアメリカで働き、暮らし続けていたんですが、仕事のキャリアも必要だけれど人生を生きていくかというバランスも必要だよね」という話に自然となっていました。夫のウイリスさんはこう続ける。「もともと僕は北カリフォルニアの田舎出身ですし、日本に友達が多いわけでもなかったので移住には抵抗がなかった。夫婦ふたりとも自然が好きだし、奥多摩で面白い暮らしができそうだなと思ったんです。最初は5年くらい日本に暮したらアメリカに帰ろうと思っていたんですが、今はとてもハッピーなのでずっと日本に住むのもいいな。食べ物も美味しいし、奥多摩では多くの友達もできてきた。異文化の中で過ごすのはなにより楽しいですよ」



町営若者住宅とは?

若年世帯などを対象とした転入人口の増加を図るために、奥多摩町では町営若者住宅の新設を展開。一般的な住宅よりも低額な賃貸設定で賃貸している。空きが次第、入居者を募集。応募に当たって年齢条件あり。

Welcome to OKUTAMA TOWN

東京の森林へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

移住・定住応援補助金

奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をされた方に、金融機関からの資金借入に対する利子補給を行っています。条件は、400万円以上の融資を受け、償還期間が10年以上であること、町内金融機関を利用する場合は、最大年額33万円まで補給します。給付期間は36ヶ月。

◎年齢条件 以下の方を対象にしています。
•45歳以下の夫婦 •18歳以下の子どもを持つ世帯
•35歳以下の方

子育て支援

子育てのしやすい町をめざし、町独自で15項目の子育て支援事業を行っています。入園・入学・進学等の支援や、保育料をはじめとした学校給食費、中学制服代、高校生通学定期代など、子育てを頑張っている方への負担を軽減するための助成があります。また、都の制度を拡充し、所得基準を超えた世帯にも医療費を全額助成します。

お問い合わせ: 奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 <http://www.town.okutama.tokyo.jp>

自然がいちばん濃い TOKYO

暮らす
奥多摩町に

